表面処理剤のトップメーカー

石原薬品株式会社

UNiCON

http://www.unicon.co.jp

神戸工場操業開始

『オンリーワン』から『ワールドワン』へ

常に新しい技術を開発し、世界で唯一の製品を目指す。

金属表面処理剤及び機器、電子材料、自動車用化学製品、工業製品の分野において、弛まぬ技術開発でこれまでにない製品を創造してきた化学薬品メーカー、石原薬品（本社・神戸市兵庫区）が5月20日、神戸市西区の神戸ハイテクパークに新設した工場の操業を開始する。スマートフォンやパソコン、自動車など、私たちの暮らしに欠かせないものの生産過程において必ず石原薬品の製品が使われていると言っても過言ではない。しかし、その現状に安んじることなく、さらに次の時代に向けて動き出している。新工場と次なる成長のステージについて、竹森莞爾社長にお話を伺った。

竹森莞爾（たけもりかんじ）社長に聞く

「世界に羽ばたく基点」を

—なぜ新工場を神戸に建てたのですか。

竹森　ワールドワンを目指し、世界の発信の拠点として、また、技術開発や製品化をスピーディーに行うために本社に近い神戸に研究・生産の場を造りたいと考え建設しました。また、その実現を加速したのは東日本大震災です。いま滋賀工場で生産している製品を、神戸の新工場でも生産することにより、災害のリスクを分散することが可能になります。

—新工場ではどのような製品を生産するのでしょうか。

竹森　第ステップとして、銅ナイフィンクやその他電子材料の研究開発と生産をおこないます。将来的には、滋賀工場でおこなっている事業も少しずつ移設し、両方の工場で生産するという形にすることによって、BCP（事業継続計画）対策も兼ね備えるようにしたいと思っています。

半導体生産を革新する技術

導電性銅ナノインクを用いて形成した回路基板

—銅ナノインクとはどのようなものですか。

竹森　現在の技術では、基盤に電子回路をつくるには3つの工程があります。基盤に銅ナノインクで印刷することにより、工程が2つに減むることになります。これが、大幅な省力化とコストダウン、環境負荷の軽減が可能になり、半導体の製造のあり方が大きく変わります。しかし、量産には未だ時間を要するので、早くこの新工場で実現させたい。それが可能になれば、フラットメタル用ディストリーの営業展開にもつながっていきます。その他電子材料もそうですが、この業界は「認定されると一度に大量の供給の要求がくる」という特性があります。それが、基盤の銅ナノインクの場合、ものの新工場は重要です。それに対応するために、ファンビノミクスの影響はいかがですか。

竹森　直接すぐに影響があるかどうかはわかりませんが、「全体的な景気は良くなる」と思います。円安の影響も特にありません。原材料を輸入し加工して製品を輸出しているので、輸入と輸出のバランスはとれています。むしろ、心配しているのは原油価格の上昇です。直接的な影響を受ける分野は主に自動車関連ですが、大きな影響はありません。昨年までの3年間、経済状況が決して良くない中で順調に売上げを伸ばしてきたのは、いまの製品技術でも経済成長率が年1～2%あれば、それにリンクした形で伸びていくことは公器であり、儲かればよいという話ではない。当社の製品がなければできることが重要です。

技術開発で社会に貢献

—社名を変更するそうですが。

竹森　この秋10月1日に「石原ケミカル（改称予定）」です。確かに「石原薬品」という名前に愛着はありますが、前を向いて行くためには、今やっていることを変えなければ、新しい技術の開発と量産ができ、世間からそれが認められた、適ったものになるでしょう。しかし、それが終局ではありませんが、どのような企業を目指しますか。

—新工場と新社名のもとで、

竹森　当社は現在東証2部上場ですが、ワールドワンの発展をおこなっていく中で